

楽曲紹介

解説=山田治生

7/18 | 7/19

7/18

7/19

シベリウス(1865-1957)

ヴァイオリン協奏曲 二短調 Op. 47

フィンランドの国民的作曲家ジャン・シベリウス(1865-1957)は子供の頃からヴァイオリンを演奏し、姉や弟とともに室内楽を楽しんだ。そして、彼はヴァイオリニストになる夢を持っていた。しかし、あがり症のため、演奏家としてのキャリアは諦め、作曲に専念した。それでもシベリウスにとって、ヴァイオリンはずっと特別な楽器であり続けたに違いない。ヴァイオリンへの思いは、1904年にヴァイオリン協奏曲として実を結んだ。

ところが1904年2月のヘルシンキでの初演(独奏はヴィクトール・ノヴァチェク、指揮は作曲者自身)は成功を取ることができなかった。改訂の必要を感じたシベリウスは、初稿を取り下げ、全面的な書き直しに取り掛かった。初稿のヴィルトゥオーゾ的なところをスリムにし、凝縮させた。初稿では第1楽章にカデンツァが2つあったが、改訂稿でシベリウスは2つめのカデンツァを削除した。第3楽章も初稿に比べ改訂稿は58小節短くなっている。改訂稿は、1905年10月にベルリンで初演された(独奏はカレル・ハルル、指揮はりヒャルト・シュトラウス)。現在、通常演奏されているのはこの1905年の改訂稿である。北欧の抒情とヴァイオリンの魅力が見事に引き出された傑作。

第1楽章 アレグロ・モデラート。ヴァイオリン群のささやきを背景に独奏ヴァイオリンが清らかな第1主題を奏でる。カデンツァは楽章の中程に置かれている。

第2楽章 アダージョ・ディ・モルト。歌謡的な緩徐楽章。木管楽器の柔らかな音楽で開始されるが、中間部ではオーケストラ全体が高揚する。

第3楽章 アレグロ、マ・ノン・タント。ティンパニと低弦楽器の弾むようなリズム

の反復によって導かれる。前の2つの楽章とは対照的な躍動的な音楽。民族舞踊のステップを思わせるような主題も現れる。

【作曲年代】1903年 【初演】初稿は1904年2月8日、ヘルシンキにて、ヴィクトール・ノヴァチェクの独奏、作曲家自身の指揮による。改訂稿は1905年10月19日、ベルリンにて、カレル・ハリルの独奏、リヒャルト・シュトラウスの指揮による

【楽器編成】フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦楽5部、独奏ヴァイオリン

ドヴォルザーク(1841-1904)

交響曲第9番 ホ短調 Op. 95 『新世界より』

チェコの国民的作曲家、アントニン・ドヴォルザーク(1841-1904)は、ニューヨークのナショナル音楽院の創設者であるサーバー女史から同音楽院の院長就任の要請を受け、1892年9月、その招きに応じてニューヨークに渡った。ナショナル音楽院は当時として珍しい人種差別をしない進歩的な学校であり、ドヴォルザークはここで黒人霊歌やネイティブ・アメリカンの音楽に出会ったという。そしてそのことがアメリカ時代のドヴォルザークの創作に大きな影響を与えた。交響曲第9番には、五音音階やリズム、持続低音などの民俗音楽的な要素が採り入れられている。また、この作品には、故郷から遠く離れた彼のノスタルジーが色濃く表れている。『新世界より』というタイトルの「新世界」とはもちろんアメリカのことを指すが、「より」という言葉には、この交響曲が、ドヴォルザークが異国から祖国に書いた手紙のような作品であることを示しているように思われる。

チョン・ミョンファンは、「この交響曲には、タイトル通り、新しい世界を発見した感情が音楽で素晴らしく表現されています。ドヴォルザークの時代にアメリカに行くことはとてもエキサイティングなことでした。彼はアメリカでヨーロッパと違う、新鮮で自由でオープンな精神を見出しました」と述べている。新時代の幕開けにふさわしい新鮮な演奏を聴くことができるに違いない。

第1楽章 アダージョー アレグロ・モルト。アダージョの序奏に続くアレグロ

の主部は、ホルンによる第1主題で始まる。

第2楽章 ラルゴ。イングリッシュホルンの哀愁を帯びた旋律は「家路」のタイトルで歌われることもある。中間部も心にしみるような切実な音楽。クライマックスではトロンボーンに第1楽章の第1主題が回帰される。

第3楽章 スケルツォ：モルト・ヴィヴァーチェ。リズムで快活なスケルツォ楽章。2つのトリオの素朴なメロディが魅力的。トリオやコーダで第1楽章の主題が現れる。

第4楽章 アレグロ・コン・フォーコ。短い序奏のあと、金管楽器が力強く第1主題を吹く。第2主題はクラリネットが提示する柔和な旋律。前3楽章の主題が少しずつ回帰して、有機的に結びつき、壮大なフィナーレが築かれていく。

【作曲年代】1893年 【初演】1893年12月16日 ニューヨークのカーネギー・ホールにて。アントン・ザイドル指揮、ニューヨーク・フィルハーモニー管弦楽団による

【楽器編成】フルート2（2番はピッコロ持ち替え）、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（トライアングル、シンバル）、弦楽5部

やまだ・はるお（音楽評論家）／1964年、京都市生まれ。1987年、慶應義塾大学経済学部卒業。著書に、小澤征爾の評伝である『音楽の旅人』、『トスカニーニ』（以上、アルファベータ）、編著書に『戦後のオペラ』（新国立劇場情報センター）、『オペラガイド（大人の観劇）』（成美堂出版）、訳書に『レナード・バーンスタイン ザ・ラスト・ロング・インタビュー』（アルファベータ）などがある。